

## マラルメの名をめぐって

鳥山, 定嗣  
九州大学大学院人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/2203047>

---

出版情報 : Stella. 37, pp.149-166, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# マラルメの名をめぐる

鳥山定嗣

1892年10月、イギリスの桂冠詩人アルフレッド・テニスの逝去の報に接し、ステファヌ・マラルメはロンドンの『ザ・ナショナル・オブザーヴァー』誌にテニス追悼の一文を草した。そのなかに次の一節がある——

詩人の名は神秘的なしかたで〔詩人が残した〕テキストすべてとともに作り直されるのであり、そのテキストの総体は、語の相互の結びつきにより、〔最終的に〕ただひとつの語、すなわち、魂のすべてを要約し、それを通りがかりの人に伝えるような意味ぶかい語を形づくるにいたる。詩人の名という唯一の語が書物の大きく開かれたページから飛び立ち、書物はその後むなしのものとなる。というのも、結局、天才はなにがあろうと生起するほかになく、さまざまな妨げにもかかわらず、やむを言えない場合は〔作品を〕読んでいなくとも、誰もがその天才を認めるほかないのだから。さて、この清らかな音節の配列、テニス、今度は莊重に、ロード・テニスと発音してみれば——たちまち、言語表現にまつわる誤解や欠落あるいは無理解を越えて、そして今後ますますそうなるだろうが、ある人物の思考が要約され、喚起されるということが私には分かる。すなわち気高く情愛に満ち、意志が強く、とりわけ俗世を離れ、高貴さにより、精神にもたらされた王侯然とした態度において示すべき一切を惜しむような人物、天真爛漫で寡黙な人物の思考である。<sup>1)</sup>

時代を経るとともに作品が読まれること少なく作者の名声のみ伝わるという事態に皮肉な眼差しを向けつつも、マラルメは「詩人の名」こそ「テキストの総体」あるいは「魂のすべて」を「要約」する「ひとつの語」であり、その「名」を呼ぶだけで詩人の「思考」が喚び起こされるようなものだと言う。死後に残るのはそのひとつの「名」であるという考えはマラルメ青少年期の詩にすでに読みとれるが<sup>2)</sup>、上のような文章をしたためたマラルメ自身、みずからの名に無関心ではなかっただろう。

ロラン・バルトは「プーストと名」と題する論考において、「固有名詞とはいわば無意識的記憶の言語的形態」であり、『失われた時を求めて』の端緒と

なった「詩的な出来事」とは「〈名〉の発見」であったと論じたが<sup>3)</sup>、マラルメにとっての「エロディアード」もまさしくそのような「名の発見」であった。1865年2月18日付ウージェヌ・ルフエビュール宛の手紙において、マラルメは「自分が得たわずかばかりの靈感はエロディアードという神々しい名に負っている」と述べ、たとえヒロインの名が「サロメ」であったにせよ、「ほの暗く、裂けた柘榴のように赤い」エロディアードという名を案出しただろうと打ち明けている。ベルトラン・マルシャルの言うように、マラルメにおいては「言葉が神話に先行する」のである<sup>4)</sup>。

「エロディアード Hérodiade」という名に「裂けた柘榴の赤」を幻視するマラルメと、「ブラバン Brabant」という名に「金褐色の響き」を、また「ゲルマント Guermantes」の鼻母音に「落日のようなオレンジ色の光」を感じとるブルースト<sup>5)</sup>。ボードレールの「照応」とランボーの「母音」をはじめ、音と色の共感覚は近代詩のトポスであったが、特定の人や場所をさす「固有名詞」はシニフィアンとシニフィエの必然的な関係というクラチュロスのな夢想をとりわけ刺激するものだろう。

マラルメは『英単語』の付録において次のように述べている——「ある口語の〈単語〉にかんする研究は〈固有名詞〉をおろそかにしては不完全なものにとどまるだろう。ほとんどの場合、きわめて原始的な方法で作られた固有名詞はさまざまな面で好奇心をそそる。固有名詞は〈言語〉といまだ渾然一体とした状態にあるため、その意味は想像力を目覚めさせるのだ」<sup>6)</sup>。マラルメの「固有名詞」への関心は、宛先の名を詩句に織りこむ『折ふしの詩』などからも窺われるが、他方、19世紀に筆名を用いることが流行っていたことを思いあわせれば<sup>7)</sup>、この詩人が『最新流行』のような例外を除いて実名を用いつづけたという事実も思い起こしておくべきだろう。

本稿では「マラルメ」という固有名詞にまつわる挿話を彼の人生にそって紹介しつつ、この詩人がみずからの「名」にどのような響きを認めていたかという点について考えてみたい。

## 青少年期の詩作

すでに幼少のころからマラルメはみずからの姓名を詩に詠みこんでいる。ステファヌ少年に詩作の初歩を教えたのは、マラルメ家が親しく付き合っていた

デュボワ・ダヴェーヌ家の娘ファニーであったが、8歳の少年は10歳年上のお姉さんに次のような詩を捧げている――

Ma chère Fanny	親しいファニー
Ma bonne amie	ぼくの親友
Je te promets d'être sage	約束するよ いくつになっても
À tout âge	いい子でいると
Et de toujours t'aimer.	いつも君を愛していると。
Stéphane Mallarmé. <sup>8)</sup>	ステファヌ・マラルメ。

音節数は不揃いながら脚韻を踏んでおり、とりわけ最終2行の押韻 (t'aimer と Stéphane Mallarmé) が注目される。

次に、二十歳の春、友人たちと一緒にフォンテーヌブローの森へ遠足した折、マラルメがエマニュエル・デ・ゼッサールと共作した詩「令嬢たちの広場」を見てみよう。「槍騎兵の不参」あるいは「先見の明の勝利」という副題に、執筆協力者として「鳥、パテ、いちご、木」を添えるこの詩は仲間内の遊びといった作だが、そのなかの一節にマラルメの名が詠みこまれている――

Fort mal noté par les gendarmes	憲兵隊に覚えの悪い
Le garibaldien Mallarmé	赤シャツ隊のマラルメは
Ayant encore plus d'art que d'armes	武より芸を得意とし
Semblait un <i>Jud</i> très-alarmé. <sup>9)</sup>	ひどく怯えたジユッドのよう。

イタリア統一運動の英雄ガリバルディ率いる義勇軍にちなむ「赤シャツ隊」や当時街道に出没した悪名高き山賊「ジユッド」と青年マラルメがどのような関係にあったかは不詳だが<sup>10)</sup>、ここでは「マラルメ」の名が「ひどく怯えた très-alarmé」と豊かな脚韻をなしている点に注目しよう。また、もう一対の脚韻をなす「武 armes」、それと比較される「芸 art」、さらに冒頭の「悪 mal」といった語も、音韻ないし字面によって詩人の名と響きあう。

### 1860-1880年代：擲楯と自説

1864年、プーレ＝マラシが匿名で刊行した『19世紀パルナス・サティリック』にも「マラルメ」の名をめぐる遊びが見られる。エマニュエル・デ・ゼッ

サルとカチュール・マンデスが互いに相手の名を題名に挙げてからかいあう  
 応答の詩、つまりデ・ゼッサール作「牢獄のカチュール・マンデス」に対して  
 マンデスが返した詩「エマニュエル・デ・ゼッサール氏の肖像のための四行詩」  
 を読んでみよう——

Ce poète, très peu rassis,	この詩人、落ち着きに欠け、
Auteur d'un livre mal famé,	評判悪しき本の著者、
Est soutenu par Malassis	マラシに支えられ
Et défendu par Malarmé. <sup>11)</sup>	マラルメに守られている。

同詩集の匿名刊行者プーレ＝マラシの名とともにマラルメの名を脚韻に配し、  
 後者を「評判悪しき mal famé」と押韻する。しかも、注意すべきことに、  
 Mallarmé の綴りに若干の変容が加えられ、2つ並ぶはずの l がひとつ抜け落  
 ちている。この一字脱落の背後には、Mal-armé（無防備）という含意と、「無  
 防備な者（マラルメ）に守られた」という洒落が読みとれる。

挿喩の調子を帯びたこの言葉遊びは同詩集の増補版『新編 19 世紀パルナス・  
 サティリック』（1866）にも引き継がれる。増補版にはマラルメ自身が寄せた詩  
 (*Une négresse par le démon secouée...* とはじまり、「黒人女」が白人の少女を  
 なぶるエロティックなショーを主題とする詩<sup>12)</sup>) も掲載されているが、その直  
 後に、これを挿喩するような作品が置かれているのである。アルベール・グラ  
 ティニー作「マラルメの愛人」がそれだが、さきほど見た mal armé（無防備  
 な）を mâle armé（武装した雄）に変えて皮肉っている——

L'amoureuse de Mallarmé	マラルメの愛人は
Est une fille aux belles hanches ;	見事な腰つきの娘。
Elle a besoin d'un mâle armé,	彼女には戦闘態勢の雄が必要だ、
L'amoureuse de Mallarmé.	マラルメの愛人には。
En vain pour lui je m'alarmai :	彼のことで気を揉んでも無駄。
Elle n'avait pas de fleurs blanches.	彼女に白い花はなかった。
L'amoureuse de Mallarmé	マラルメの愛人は
Est une fille aux belles hanches. <sup>13)</sup>	見事な腰つきの娘。

また、1885 年アンリ・ボクレールとガブリエル・ヴィケールが偽名を用いて  
 共作出版した『頽廢デリケサンス、アドレ・フルバットのデカダン詩篇』<sup>14)</sup> はデカダンスお

よび象徴主義のパロディーとして知られるが、ここにも固有名をもじった同種の遊びが見出される。出版者「リオン・ヴァネ Lion Vanné」（へとへのライオン）がレオン・ヴァニエ Léon Vanier のもじりであるほか、アドレ・フルベットの旧友マリウス・タポラ（著者と同じく架空の人物）による序文の著者評伝には「未来の詩の二大先導者」として Étienne Arsenal と Bleucoton の名が挙げられているが、両者はそれぞれマラルメとヴェルレーヌを指している。「エティエンヌ」は「ステファヌ」と同語源のフランス語異形であり、マラルメ本人の戸籍名・洗礼名でもあった<sup>15)</sup>。姓の「アルスナル」は武器倉庫という意味で「無防備 mal armé」をふまえた皮肉である。他方、「ブルコットン」（青 bleu + 木綿 coton）は「ヴェルレーヌ」（緑 vert + 羊毛 laine）の置換である。なお、同書に19篇収められた「デカダン詩篇」の一篇「象徴的牧歌 Idylle Symbolique」はマラルメの「続誦（デ・ゼッサントのために）」のパロディーであり、その最終2節をエピグラフに掲げている。

さらに、モンマルトルの有名な文芸キャバレーが発行していた週刊新聞『ル・シャ・ノワール』紙上に「数人の友人たち」と題するソネを連載していたヴェルレーヌが、同紙1889年12月14日号においてマラルメに捧げたソネにも同種の遊びが見出される。それは翌年、若干の改稿をへて『献辞』に収録されるが、ここでは『ル・シャ・ノワール』初出のテキストを掲げよう――

Des jeunes — c'est imprudent — Ont, dit-on, fait une liste Où vous passez symboliste. Symboliste ? Ce pendant	若者たちは——軽率にも—— リストを作ったそうで あなたはサンボリストとのこと。 サンボリストだって？ その一方で
Que d'autres, dans leur ardent Dégoût naïf ou fumiste Envers la pauvre rime iste, M'ont bombardé décadent.	他の輩は、激しい調子で 哀れな脚韻「～イスト」に対し 素朴あるいはふざけた嫌悪を示し おれをデカダン呼ばわりした。
Soit ! Chacun de nous, en somme, Se voit-il si bien nommé ? Point ne suis tant enflammé	まあいい！つまりは、我ら皆、 ちゃんとした名で呼ばれてるつもり？ こんなに燃え上がったことはない
Que ça vers les nymphes, comme	ナンフの方のあれよりも、ちょうど

Vous n'êtes pas mal armé,  
Plus que Sully n'est Prudhomme.<sup>16)</sup>

あなたが無防備ではなく、  
シュリーが誠実な人でないように。

ジュール・ユレによる『文学の進展についてのアンケート』（1891）において、「象徴主義」を喧伝する「サンボリスト」たちを「サンバリスト（シンバル叩き）」と呼んで流派のレッテルを笑い飛ばしたヴェルレーヌは<sup>17)</sup>、ここでも「リスト」を作り「イスト」で分類したが「若者たち」を揶揄しつつ、「名は体を表さない」ということをマラルメとシュリー・プリュドムの実例を挙げて示している。「ナンフの方のあれよりも Que ça vers les nymphes」という謎めいた言い回しには、ヴェルレーヌ自身の名も秘められている。和歌の「物の名」にも相当するこの隠し名は、『猷辞』所収の改稿では «vers les n...ymphes» と中断符を挿入することによりいっそう暗示的になっている<sup>18)</sup>。

以上の例から、Mallarmé の名を Mal+armé と読み替えることは当時の文壇でかなり広まっていたと推測されるが、この点について、当時火曜会に時々顔を出していたイギリス人のロバート・ハーバラ・シェラードが興味ぶかい証言を残している。オスカー・ワイルドの友人で、ワイルドの伝記作家として知られるシェラードは、1891年ごろ、ローマ街の師の神秘的な（実際のところ意味がよく分からない）文言に耳を傾けていたが<sup>19)</sup>、ある時マラルメに次のように率直に尋ねたらしい――

私はその日マラルメに、彼の姓は mal と armé という2つの語に由来しているのではないかと尋ねたことを思い出す。そのような姓の由来にもとづいて彼の祖先をたどってゆけば、軍人と騎士の時代の、十分に武装ができなかった (ill-armed) ある騎士にまで遡ることだろう。その騎士は粗末な出で立ちであったにもかかわらず、おそらくは勇猛果敢に戦って手柄を立てたことだろう。マラルメはこうした考えを認めなかったが、そのことは彼の複雑な性格を照らし出すものと私には思われる。彼は次のように言った――「私は常々、自分の姓が mal と larmé という2つの語に由来すると思ってきました――つまり邪悪な涙の持ち主です」<sup>20)</sup>

『マラルメ伝』の著者ステンメッツは、この「にわか語源学者」の空想に対する詩人の返答を「いささか奇妙」な「風変わりな仮説」と述べたうえで、おそらくマラルメは、「yx のソネ」の「冥府の河に涙を酌みにいった」主人さながら、  
「憂鬱の徴の下に」身を置こうとし、ヴェルレーヌから授けられた「呪われた詩

人」をみずから演じようとしたのではないかと推測している<sup>21)</sup>。

シェラードの証言は、真偽のほどが定かでないうえ、注意を要するものである。というのは、マラルメが英語で答えたのでないかぎり（両者はフランス語で文通しており、その可能性は低いだろう）、その言葉は翻訳という行為によって不正確になっているからだ。シェラードはマラルメの言葉を直接話法で引用しているが、その部分の英語原文は次のようである——

“I have always held,” he said, “that my name derives from the two words *mal* and *larmé* — the man of evil tears.”

会話がフランス語でなされたとすれば、マラルメは実際に何と言ったのか。『マラルメ伝』に読まれるフランス語（«J’ai toujours cru que mon nom provient des deux mots *mal* et *larmé* — l’homme aux larmes malignes.»）はマラルメ『書簡集』からの引用、つまり同『書簡集』の編者モンドールとオースティンによる仏訳である<sup>22)</sup>。が、編者自身、「邪悪な涙 *aux larmes malignes*」という訳語について別の可能性——「涙をほとんど流さない *versant peu de larmes*」——を示唆しているように、マラルメが本当にシェラードの証言に相当するフランス語を発したのか、とりわけ *mal* に「悪」の意味を含ませる意図があったかどうか、その点は疑問が残る。*mal armé* を *mal larmé* に置き換えるなら、*mal* は副詞「不十分に」に解する方が自然ではないだろうか。いずれにせよ、この挿話が事実根ざしたものならば、翻訳による歪曲可能性に一定の留保を付してなお確かなことは、マラルメがおのれの姓に含まれる「無防備な」という含みを認めようとはせず、「武器」を「涙」に置き換えることでこの名の起源を別のところに求めようとしたということである。

他方、ステンメッツの指摘するように、マラルメの返答には、彼の姓に含まれる「2つの *l* を説明しようとする工夫」が窺われるという点も見逃してはならないだろう。マラルメがおのれの姓に *deux l*（2つのエル）を、すなわち同音異義語の *deux ailes*（2つの翼）を認めていたという仮説はすでに1970年代、ブリジット・ルヴェルによって提起されていた<sup>23)</sup>。ルヴェルはマラルメが幼少期に体験したかもしれない光景を次のように想像する——同級の悪童たちから「スキだらけ！ *le mal armé*！」とからかわれ、マラルメ少年は「ちがう、*deux l* だ」と言い返す。と、「だったら飛んでみるよ」……何の裏付けもない



想像をそのまま受け入れることはできない。が、マラルメの作品のなかに「翼」のイメージが散見すること、とりわけ第一次『現代高踏詩集』（1866）に10篇ほど載ったマラルメの詩の巻頭を飾る「窓」の一句に「羽根のないわが2つの翼 mes deux ailes sans plume」という表現が見られること、さらにマラルメが自分のイニシャル SM を組み合わせて図柄にしたサインがちょうど翼を広げた鳥のように見えるといった指摘などを踏まえて考え直してみると、ルヴェルの仮説は実証不可能とはいえ、それを完全に否定することもためられる（なお、クローデルの『百扇帖』の一句「M それは2つの翼をもって訪れる使者 M c'est le messenger qui arrive avec ses deux ailes」にマラルメのイニシャルの図柄の反映を見てとることもできるかもしれない<sup>24)</sup>）。

マラルメの名に含まれる deux l の「翼」という問題も興味ぶかいが、ここでは先のシェラードの証言にあった「涙」のテーマについてももう少し考えてみよう。たとえば1866年に初稿が書かれたエロディアード「古序曲」の冒頭詩句には「翼」のイメージ（「曙」を「鳥」にたとえる）とともに、「涙 larmes」と「警鐘・不安 alarmes」の脚韻が見出されるが、しばしば指摘されるように、そこに詩人の「署名」を認めることもできよう<sup>25)</sup>。また、1873年『テオフィル・ゴーチエの墓』に寄せた「喪の乾杯」にも同じ脚韻 larme - alarme（第21-22行）が用いられているが、その「涙」と「警鐘」にも「高くそびえる」「ゴーチエ」（第51-52行の押韻 altier - Gautier）を弔うマラルメが自身の詩句に潜ませた名の刻印を読みとることができるかもしれない<sup>26)</sup>。

マラルメの名に「警鐘 alarme」が含まれているという偶然は、この名をめぐる想像を、マラルメと彼が若き日に心酔したボードレールとの微妙な関係へと導くものでもある。川瀬武夫がマラルメの「窓」を論じつつ述べたように<sup>27)</sup>、1864年4月初旬、カザリスの従姉妹ル・ジョーヌ夫人のサロンにおいて、マラルメの「窓」の初稿（第一次『現代高踏詩集』掲載前）が友人のデ・ゼッサールによって朗読された際、その場に居合わせたボードレールは「何も言わずに聴いていた」らしく、わずかな手がかりから推し量るかぎり、『悪の華』の詩人はマラルメに対して好印象を抱いていなかったようだが<sup>28)</sup>、若い世代に対する関心はまちがいにあつた。死の前年ブリュッセルから母親のオーピック夫人に宛てた手紙（1866年3月5日付）の一節がその証左となる――

これらの若者たちにはそれなりの才能があります。しかし、なんとという狂気の沙汰！なんとという誇張、なんとという若気のうぬぼれでしょう！数年前から僕はあちこちで憂慮すべき模倣や傾向を見て取っていました。僕は模倣者にもまして厄介なものを知らないし、一人でいることをなによりも好みます。でもそれは可能なことではなく、さらにボードレール派というものが存在するらしいのです。<sup>29)</sup>

ここで問題となっているのは、1865年11月から12月にかけて『<sup>ラルメ</sup>芸術』誌に連載されたヴェルレーヌの「ボードレール」論（『悪の華』を礼賛する論考）であり、ボードレールがここで念頭に置いている「若者たち」の筆頭はヴェルレーヌにちがいない。だが、川瀬武夫が指摘したように、引用下線部の原文 *m'allarmait*（直訳すれば「自分を憂慮させる」）に、偶然か否か、Mallarmé の名の響きが認められるという点を考慮に入れれば、「ボードレール派」を憂慮するボードレールの意識——あるいは無意識——のなかにマラルメの存在も潜んでいたかもしれない。

#### 1890年代：ルイス、ヴァレリー、クローデルの証言

マラルメの名をめぐるこのような想像力の戯れは、当時火曜会に集うものたちのあいだでも共有されていた。そのことを示す資料を以下に挙げてみよう。

まず1894年4月24日ピエール・ルイスがポール・ヴァレリーに宛てた手紙に次のような一文が見られる——

今晚夕食に来てください。そのあと私たちみんなのラルメ宅へ行きましょう。<sup>30)</sup>

『三声書簡』の編者が注記しているように「ラルメ」とはマラルメのこと。Mallarmé の名を *Ma Larmé* と読み替えたうえ、「私の」ではなく「私たちみんなのラルメ *notre Larmé à tous*」と洒落たわけである。マラルメの名から「涙」を抽出するこのルイスの手紙は、先に見たシェラードの伝えるマラルメ自身の発言と重なるものである。が、次のヴァレリーの手紙を参照すると、シェラードがマラルメに突きつけた最初の読みも根強いものであったと推察される。

1896年6月26日、ヴァレリーがアンドレ・フォンテーナスに宛てた手紙は、全文ラテン語で書かれ、内容はイタリア北西部レーリチへの旅の計画をしばし延期してほしいというもののだが、そのなかにマラルメの名が現れる——

Nequidem ad exemplum nostri Stephani Malearmati exorare possum : Offero vas poeticum neque internum pursæ [*sic*] habeo fulgentes.

我らがステファヌス・マレアルマトゥスの例にならいて「詩の盃を捧げる」と述べて懇願するわけにもゆかず、さりとて財布の中身も輝かしきものも持たぬ身なり。<sup>31)</sup>

「詩の盃を捧げる」とはマラルメの詩「喪の乾杯」の一句——「わが空<sup>から</sup>の盃を捧げよう、黄金の怪物が苦しむ盃を！ J'offre ma coupe vide où souffre un monstre d'or !」——へのアリュージョンであり、「黄金の怪物」を「財布の中身」に見立て、「輝かしきもの」すなわち金がないが、無心するわけにもいかないと述べている。高尚と低俗をまぜあわせるユーモアあふれる手紙だが、特に「ステファヌス・マレアルマトゥス」（引用原文では属格）という名に注目しよう。これは単にステファヌ・マラルメの名をラテン語風に読んだだけではなく、先述した遊びが読みこまれており、Malearmatus を Mal + armatus に分解すれば、ちょうどフランス語の Mal armé に相当する<sup>32)</sup>。

ルイスやヴァレリーと同世代のポール・クローデルもやはりマラルメの名に「武器・武装」の響きを感じとっていたようである。1897年3月23日、マラルメ55歳の誕生日を祝して、火曜会に集う若者たちは各々自筆の詩文を寄せあったアルバムを贈呈したが、その巻頭を飾ったのはクローデルのソネであった（21人による23作が詩人のアルファベット順に並んでいる）。後半のテルセ2節を以下に掲げよう——

Gardien pur d'un or fixe où l'aboi vague insulte !  
Si, hommage rustique et témoignage occulte,  
Ma main cherche quoi prendre au sol pour s'en armer,

Je choisis de casser la branche militaire  
Dont la feuille à ta temple honore, Mallarmé,  
Amère, le triomphe, et, verte, le mystère.<sup>33)</sup>

漠たる罵声の侮辱のさなか不動の金を守る純粋な人！  
もし、鄙びた敬意と隠密の証言として、  
わが手が大地より何かを取って武装するならば、

私は軍の枝を折り、マラルメよ、

その葉を君のこめかみに捧げて讀えよう、  
痛切に、その勝利を、また、青々と、その神秘を。

「マラルメ」の名を脚韻に配し、これを「武装する *s'en armer*」と押韻する一方、*militaire*（軍の）と *mystère*（神秘）の押韻でこの名を包む。「軍の枝 *la branche militaire*」という表現は「軍事部門・軍隊組織」を意味する慣用表現に含まれる「枝」のイメージを蘇らせつつ、縁語の「葉」を通して「勝利と神秘」を引き出す。Mallarmé から *amère*（苦々しい・痛切な）への音韻上の推移はなめらかであり（*amère* はさらに *verte* および *mystère* と呼応する）、「マラルメ」という名を響かせる工夫が読みとれる。

#### 晩年の言語遊戯：『折ふしの詩』

最後に、マラルメが1883年ごろから1898年に世を去るまで折にふれて物した短詩群『折ふしの詩 *Vers de circonstance*』を取り上げよう。詩人みずから「郵便の気晴らし *Récréations Postales*」あるいは「郵便つれづれ *Les Loisirs de la poste*」と称した遊戯、すなわち「角封筒の形態と4行詩の配置とのあいだの明白な関連」という「純粹な美的感情」にもとづいて先方の名と住所を短詩（多くは8音節4行押韻詩）に織りこむ遊戯は、詩人の「固有名詞」への関心を雄弁に物語るものだが、そこにはマラルメ自身の名も見出される。

初出および出版までの経緯を簡単にたどれば、『折ふしの詩』が刊行されたのはマラルメの死後であった——1920年、前年に逝去した娘ジュヌヴィエーヴとその夫エドモン・ボニオによる編集のもと刊行された——が、詩人には生前からこれらの詩を公表する意図があった。1892年、マラルメは宛先を詠みこんだ4行詩68篇を清書し、友人の画家ホイッスラーの協力を得て、ロンドンのオズグッド＝マッキンヴェーン社と交渉、翌年さらに詩篇を加えた89篇を宛先の人物の職種（「詩人」「画家」「音楽家」など）により10章に分類、各々に9篇（うち1章のみ8篇）を配して編集し、「郵便の気晴らし」と題した。この計画は実現しないが、1894年、企画に関心を示したシカゴの前衛雑誌『ザ・チャップ・ブック』のために、「郵便の気晴らし」から27篇を選び、テキストに手を加えたうえ、総題を「郵便つれづれ」と改め、同誌1894年12月15日号に公表したのが初出である。

ここでは「郵便の気晴らし」の最後の章「数人のご婦人方 Quelques dames」の第9番、すなわち89篇を収める作品の掉尾に置かれた詩を見てみよう——

Par la bise transi, pauvre homme	北風に凍える、哀れな者よ、
Ou si tu les connais, charmé	近づきになれば魅了されよう、
Rue, au 89, de Rome	ローマ街、89番地へ行きたまえ
Va chez Mesdames Mallarmé. <sup>34)</sup>	マラルメのご婦人方のもとへ。

ベルトラン・マルシャルによれば、マラルメは原稿を出版社に送るにあたって元の詩に手を加えており、この詩にも異文が認められるが、特に注目されるのは4行目のMadameをMesdamesに変更したことである<sup>35)</sup>。初めて公表する郵便の詩を締めくくるにあたり、マラルメは妻宛の詩句を選び、それを妻と愛娘の兩人宛に改めたのである。もう一点この短詩で注目したいのは、Mallarméの名とcharméの押韻である。郵便配達人がマラルメ夫人と令嬢に魅了されるというかたちで妻と娘へのオマージュとなっている。

興味ぶかいことに、『折ふしの詩』には同じ脚韻の組合せが散見する——

Quelqu'un par vous charmé	あなたに魅了された何某
Stéphane Mallarmé. <sup>36)</sup>	ステファヌ・マラルメ

「写真」の項目に見える短詩だが、マラルメは写真家ヴァン・ボッシュ Van Bosch に撮ってもらった自身の写真にこの2行詩を添えて返礼している。

もうひとつ「献辞、自筆、種々の郵便物」の項に分類された次の2行詩——

Malheur à qui n'est pas charmé	マラルメの4行詩に
Par quatre vers de Mallarmé. <sup>37)</sup>	魅了されぬ者に災いあれ。

マルシャルが初めて収録したこの詩には、メリー・ローランの筆跡による草稿が残っているらしい<sup>38)</sup>。マラルメの作を彼女が写したのか（あるいは彼女自身の作か）、確かなことは分からないが、この8音節2行詩はマラルメがメリー・ローランに「扇」とともに贈った次の10音節2行詩と奇しくも呼応する——

Heureux pour qui, souriante et farouche,	幸いなるかな、微笑みながら靡かぬ女、
Méry Laurent met le doigt sur sa bouche. <sup>39)</sup>	メリー・ローランに口止めされる男は。

メリーの手で書かれた2行詩は、詩的遊戯を解する二人の親密な間柄を垣間見させるとともに、その詩を筆写した女性が「マラルメの4行詩に魅了」された人であったらうことを想像させる。

メリー・ローラン (1849-1900) は、パリ在住のアメリカ人歯科医トーマス・W・エヴァンスに囲われる高級娼婦としてプーローニュの森近郊に居を構え、エドゥアール・マネのモデルとして知られるほか、テオドール・ド・バンヴィルやフランソワ・コペーなどの文人たちとも関係を結ぶ自由奔放な女性であったようだが、マラルメが7歳年下の彼女と親しく交際するようになるのは、マネの死後、1883年以降のことである。『折ふしの詩』の開始時期はまさしく1883年ごろと推定され、なかでもメリー宛のものが群を抜いて多いことから、『折ふしの詩』の発端はこの女性との交際と密接な関係にあると推測される<sup>40</sup>。マラルメはメリーを「孔雀」と呼び、ギャラントリーとからかいの調子の入り混じった軽やかな短詩を数多く残している。『折ふしの詩』のなかでマラルメの名を脚韻に配するものは、先に見たように、いずれも Mallarmé - charmé の押韻を響かせている。ここにマラルメを魅惑した女性の色香の反映を見てとるべきか、あるいは charme という語の語源的な意味——のちにヴァレリーが詩集の題名にこめる「carmen 歌・呪文」——を踏まえて、詩歌に「魅了された」詩人という含意を読みとるべきか。いずれにせよ、マラルメは晩年みずからの名を charmé と押韻することを好んだように思われる。

## 結 び

マラルメという名はこの詩人の生涯の折々にさまざまな手によって詩句に織りこまれた。彼を揶揄する者、彼を慕う者、また彼自身、この名を脚韻に配して響かせた。本稿で見たように、この名と押韻する語には一連の変遷が認められる。幼少期における t'aimer - Mallarmé の押韻にはじまり、青年期および中年期における Mal armé の揶揄と Mal larmé の自負を経て、晩年 Mallarmé - charmé の押韻に至る。その過程は——たとえこれらの例が詩人の作品群の中でわずかばかりの位置を占めるにすぎないにせよ——マラルメがみずからの名についてめぐらせたであろう思念、さらにいえば詩人としての自己意識の片鱗を示しているように見える。

本稿のはじめに引用した「テニス」論の一節を読み直してみよう。「魂のす

べての要約 *résumé de toute l'âme*』という表現はマラルメの詩論として知られる無題の7音節ソネ (*Toute l'âme résumée...*) を想起させるとともに、詩人の魂を要約する「名」がテキストの総体をまとめ上げる「ただひとつの語」となるという発想は、「詩の危機」(厳密には「韻文詩の危機」)の有名な最後のくだりを思い起こさせる——

詩句 (vers) とは複数の語 (vocables) を用いて、完全なひとつの語 (un mot total), 新しく、国語 (langue) には奇妙で、あたかも呪文のような一語を作り直すものであり、そうした詩句がことば (parole) の孤立を成し遂げる [...]。<sup>41)</sup>

「詩句」が「複数の語」からなる「完全な [= 総体をなす] ひとつの語」であるとするれば、「詩人の名」はそうした詩句の総体——「魂のすべて」——を要約する「ただひとつの語」にほかならない。そして両者はともに「作り直される *se refaire*」べきものである。幼少期にみずからの名が6音節、すなわちアレクサンドランの半句をなすことに気づいたステファヌ・マラルメは、さまざまな押韻の響き——愛 (*t'aimer*)、無防備 (*Mal armé*)、涙 (*larmé*)、警鐘・不安 (*alarmé*)、魅惑・歌 (*charmé, carmen*) ——を経験しながら、偶然に与えられた名にふさわしい響きを与えようとしたのではないだろうか。「昼 *jour*」という語に暗い母音をあて、「夜 *nuit*」に明るい音をあてる言語の不完全な「偶然」を「意味と音韻の両面で交互に鍛え直すという技巧」<sup>42)</sup>によって克服しようとしたこの詩人、同じくテニソンを敬愛したエドガー・ポーにマラルメが捧げた「墓」を援用して言えば、「部族の語により純粋な意味を与える」ことを使命とした詩人は、「ステファヌ・マラルメ」という名をまさしく「彼自身」<sup>43)</sup>のものにしようと試みたのではないだろうか。

## 註

\*) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 17K13425」の助成を受けた研究の一部である。

1) Stéphane MALLARMÉ, «Tennyson vu d'ici», *The National Observer*, 29 October 1892, repris dans *Divagations* en 1897. 拙訳にあたり、高橋康也訳「テニソン——対岸より見たる」(『マラルメ全集Ⅱ』, 筑摩書房, 112-113頁)を参照した。

2) 1859年, 17歳で世を去った親戚の少女ハリエット・スマイスのために書かれた「悲

- 歌」[彼女の墓は閉ざされている……] (Stéphane MALLARMÉ, *Poésies*, éd. Bertrand MARCHAL, Paris : Gallimard, coll. «Poésie», 1992, p. 118)。
- 3) Roland BARTHE, «Proust et les noms», in *To Honor Roman Jakobson : Essays on the Occasion of His Seventieth Birthday 11 October 1966*, vol. I, The Hague - Paris : Mouton, 1967, pp. 150-158.
  - 4) Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance, Lettres sur la poésie*, éd. Bertrand MARCHAL, Paris : Gallimard, coll. «Folio classique», 1995, p. 226.
  - 5) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, éd. Jean-Yves TADIÉ, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-89, t. I, pp. 9 et 169 / 吉川一義訳『失われた時を求めて』, 岩波文庫, 第1巻, 37-38, 369-370頁。
  - 6) Stéphane MALLARMÉ, *Œuvres complètes*, éd. Bertrand MARCHAL, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1998-2003, t. II, p. 1087.
  - 7) Carmela CIURARU, *Nom de Plume : A (Secret) History of Pseudonyms*, New York : Harper, 2011. 同書によれば, 「筆名」の流行は19世紀に頂点に達し, 20世紀以降テレビや映画の普及と軌を一にして下火となる (voir Introduction, p. xxii)。
  - 8) MALLARMÉ, *Poésies*, éd. citée, p. 89.
  - 9) *Ibid.*, p. 152. 原文のイタリックについては『マラルメ全集Ⅲ』別冊329-330頁における田中淳一による解題を参照。
  - 10) Jean-Luc STEINMETZ, *Stéphane Mallarmé*, Paris : Fayard, 1998, pp. 60-61. この山賊(人殺し)はマルセル・シュオップ「顔を覆った男」にも登場する。Voir Marcel SCHWOB, «L'Homme voilé», *Cœur double*, Paris : Ollendorff, 1891, p. 74 *sqq.*
  - 11) *Le Parnasse satyrique du dix-neuvième siècle* [1864], suivi du *Nouveau Parnasse satyrique* [1866], Bruxelles (Sous le Manteau), 1881, t. II, p. 132.
  - 12) 『新編パルナス・サティリック』には「ピンクの唇 Les Lèvres roses」という題で掲載されたが, この題名はマラルメ自身によるものではない可能性が高い。Voir Jean-Luc STEINMETZ, *Stéphane Mallarmé, op. cit.*, p. 500, note 18.
  - 13) *Le Nouveau Parnasse satyrique du dix-neuvième siècle*, Eleutheropolis [Bruxelles], 1866, p. 146.
  - 14) [Henri Beauclair et Gabriel Vicaire] *Les Délivrescences : poèmes décadents d'Adoré Floupette*, Byzance : Lion Vanné [Paris : Léon Vanier], 1885.
  - 15) Stéphane はギリシア語 Stephanos (Στέφανος) (「冠 couronne」の意) に由来し, そのフランス語の異形 Étienne は14-15世紀ごろ生じたとされる。マラルメについては, 母方の祖母の洗礼名にちなんで Étienne と名付けられたが, 日常生活では幼少期より Stéphane と呼ばれていたらしい (voir Jean-Luc STEINMETZ, *op. cit.*, p. 21)。なお, マラルメは『英単語』においてフランス語, ラテン語, ギリシア語から英語に入った「洗礼名」として Stéphane に相当する英語名 Stephen を挙げている (voir MALLARMÉ, *Œuvres complètes*, éd. citée, t. II, p. 1090)。
  - 16) Paul VERLAINE, «Quelques amis (suite) / À Stéphane Mallarmé», *Le Chat noir*,



14 décembre 1889, p. 1450, recueilli avec remaniement dans *Dédicaces*.

- 17) Jules HURET, *Enquête sur l'évolution littéraire*, Paris : Bibliothèque-Charpentier, 1891, pp. 67-68.
- 18) マラルメはヴェルレーヌに宛てた郵便詩において「ヴェルレーヌ」の名を「鼠蹊部のあたり vers l'aine」と押韻するというきわどい洒落を飛ばしているが、これは先に引いたヴェルレーヌの詩への返答だろうか――

Je te lance mon pied vers l'aine	股に足蹴を食わせるぞ
Facteur, si tu ne vas où c'est	郵便屋さん、行かないのなら
Que rêve mon ami Verlaine	わが友ヴェルレーヌの夢みる所
Ru'Didot, Hôpital Broussais.	デイド街、ブルッセ病院に。

このマラルメの郵便詩の年代は不確かであり、ヴェルレーヌがブルッセ病院で療養を繰り返した 1886 年 11 月から 1893 年 11 月までの間と推定される。Voir MALLARMÉ, *Vers de circonstance*, éd. Bertrand MARCHAL, Paris : Gallimard, coll. «Poésie», 1996, p. 83 et p. 235 (note).

- 19) 1891 年 2 月シェラードはワイルドとジャン・モレアスと一緒に昼食にマラルメを誘っており、その頃のことでないかと推測される(マラルメ訳エドガー・ポー『大鴉』の豪華版についての言及があるため、少なくとも 1875 年以降のことである)。またシェラードは自分が「外国人」とであると断ったうえで、マラルメの言葉をよく理解できなかったと告白している。Voir Robert Harborough SHERARD, *Twenty Years in Paris*, London : Hutchinson, 1905, pp. 387 et 390.
- 20) *Ibid.*, pp. 390-391. 拙訳にあたり、ジャン＝リュック・ステンメッツ『マラルメ伝』(柏倉康夫・永倉千夏子・宮寄克裕訳)、筑摩書房、2004 年、19-20 頁を参照した。
- 21) Jean-Luc STEINMETZ, *Stéphane Mallarmé, op. cit.*, pp. 21-22.
- 22) MALLARMÉ, *Correspondance*, éd. Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, 11 vol., Paris : Gallimard, 1959-1985, t. XI, pp. 60-61, note 2.
- 23) Brigitte LEVEL, «Genèse poétique» ou «Histoire littéraire»: les deux ailes de Mallarmé», *Le Cerf-Volant*, n° 80, 1972, pp. 19-21; «Vocatif et vocation: le cas Mallarmé», *Les Pharaons*, n° 21, 1975, pp. 6-11. Brigitte LÉON-DUFOUR [LEVEL], «Mallarmé et l'alphabet», *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, n° 27, 1975, pp. 321-343.
- 24) Paul CLAUDEL, *Cent phrases pour éventails* [1927], n° 162 (使翼), éd. Michel TRUFFET, Paris : Gallimard, coll. «Poésie», 1996, non paginé.
- 25) Monic ROBILLARD, *Le désir de la vierge: Hérodiade chez Mallarmé*, Genève : Droz, 1993, p. 52. 海老沢英行「Xのソネ——ステファヌ・マラルメのアナグラム」, 『藝文研究』第 64 号、慶應義塾大学藝文学会、1993 年、75 頁。
- 26) 第 21 行詩句「J'ai méprisé l'horreur lucide d'une larme.」には「涙」に対する「侮蔑」が読みとれるが、草稿の異文は「涙の澄みきった恐怖を長引かせた J'ai pro-

*longé l'horreur...*」であった (MALLARMÉ, *Poésies*, éd. citée, p. 221)。また第 22 行以下には「わが神聖な詩句 *mon vers sacré*」の「警鐘」に耳を貸さぬ「通行人 (群衆) のひとり」への批判というかたちでマラルメ自身の詩句への自己言及も見られる。

- 27) 川瀬武夫「〈危機〉以前の危機——マラルメ《窓》をめぐる」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 第 2 分冊, 第 41 輯, 1995 年, 43-44 頁 (33-45 頁)。
- 28) 1865 年 2 月, カザリスはマラルメ宛の手紙で「君の神であるボードレールはどうやら君のことを嫌っているようだ」と噂を伝えているほか, ボードレールの遺稿「哀れなベルギー」の一節に, マラルメの散文詩「未来の現象」に対する批判的な評言が認められる。Voir *Documents Stéphane Mallarmé VI*, éd. Carl Paul BARBIER, Paris : Nizet, 1977, p. 258 ; Charles BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, éd. Claude PICHOS, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1976, t. II, p. 831 [F<sup>t</sup> 39].
- 29) BAUDELAIRE, *Correspondance*, éd. Claude PICHOS, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, t. II, p. 625. 拙訳にあたり, 川瀬武夫前掲論文および阿部良雄訳 (『ボードレール批評 4』, ちくま学芸文庫, 335 頁) を参照した。
- 30) André GIDE - Pierre LOUÏS - Paul VALÉRY, *Correspondances à trois voix 1888-1920*, éd. Peter FAWCETT et Pascal MERCIER, Paris : Gallimard, 2004, p. 704.
- 31) Paul VALÉRY - André FONTAINAS, *Correspondance 1893-1945*, éd. Anna Lo GIUDICE, Paris : Éd. du Félin, 2002, p. 88. ちなみに同書簡集の編者による仏訳——*«Ni je ne peux prier selon l'exemple de notre Stéphane Mallarmé : Je vous offre mon vase vide où souffre le monstre d'or, puisque je n'ai de resplendissant ni l'éclat poétique ni l'intérieur de mon porte-monnaie.»*——にはラテン語原文に見られない要素 (下線部) が見られるが, マラルメの詩へのアリュージョンを訳に反映させたものと思われる。なお, 原草稿を参照しえていない現在, 編者の解説が正しいと前提したうえで, ヴァレリーのラテン語にはいくつか疑問が残る。まず, *pursae (sic)* は編者の仏訳 *porte-monnaie* から判断すれば, 「財布」に相当するラテン語風の造語 *pursa, ae* と推測される (ちなみに英語 *purse* はギリシア語の *βύρσα*, 俗ラテン語の *bursa* に由来する)。また, 仏訳の *l'éclat poétique* は原文をどう解釈したか不明だが, 拙訳では *poeticum* を *vas* にかかる形容詞と解釈した。また, 仏訳にならって *habeo* の目的語として訳した *internum* と *fulgentes* はともに形容詞 (前者は中性単数対格, 後者は動詞 *fulgere* の現在分詞の男性/女性複数対格, あるいは呼格か) であり, 修飾先の名詞が示されておらず, 解釈に疑問が残る。

なお, ヴァレリーは『エウパリノス』のなかでマラルメの詩「<sup>フローズ</sup>統誦」の一句を引きつつ, その作者をギリシア風に「ステパノス *Stephanos*」と呼んでいる。Voir VALÉRY, *Œuvres*, éd. Michel JARRETY, 3 vol., Paris : Librairie Générale Française, coll. «Livres de Poche», 2016, t. I, p. 486.

- 32) 山田広昭はヴァレリーの「男性ヒステリー」および「テスト氏の女性化」を論じた示唆に富む論考において、語り手の前で服を脱ぐテスト氏の姿に、ヴァレリーの前でフランネルの肌着を替えたマラルメの姿（1898年9月12日ジッド宛書簡）を重ね合わせ、両者に共通する「女性化のプロセス」を指摘しつつ、Teste という名の含意（ラテン語の *testa*, *testis*, *testiculus*）とあわせて、「男性性を欠いた」という意味で “mal armé” に言及している。Voir Hiroaki YAMADA, «Masculin / Féminin, ou comment rêve un hystérique mâle», *Rémanences*, n<sup>os</sup> 4-5, 1995, pp. 226-227.
- 33) Paul CLAUDEL, «*Celui-là seul...*» [sonnet sans titre], in *Album offert à Mallarmé en 1897*, conservé à la Bibliothèque littéraire Jacques Doucet, cote MNR Pr 136.
- 34) MALLARMÉ, *Vers de circonstance*, éd. citée, p. 82.
- 35) *Ibid.*, p. 235, note 9.
- 36) *Ibid.*, p. 104.
- 37) *Ibid.*, p. 170.
- 38) *Ibid.*, p. 276, note 173.
- 39) *Ibid.*, p. 96.
- 40) 『マラルメ全集Ⅲ』別冊, 297-308頁, 安藤元雄による解題を参照。
- 41) MALLARMÉ, «Crise de vers», *Œuvres complètes*, éd. citée, t. II, p. 213.
- 42) *Ibid.*, pp. 208 et 213.
- 43) «Le Tombeau d'Edgar Poe», vers 1 et 6, in MALLARMÉ, *Poésies*, éd. citée, p. 60.